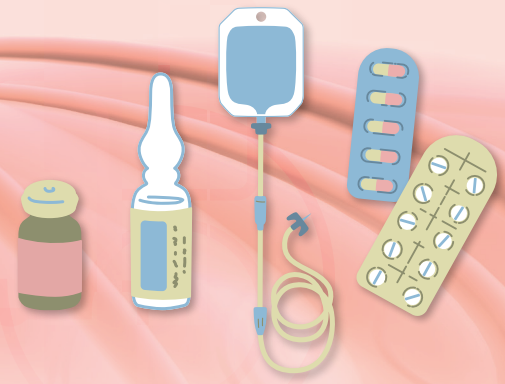
まずはここから！

# 症例ベースで学ぶ、抗がん剤の副作用マネジメント



一萬田　正直
公益財団法人 日本小動物医療センター付属日本小動物がんセンター
公益財団法人 日本小動物医療センター 循環器科

## 第1回　総　論

### 連載にあたって

**“この子が穏やかに、苦しまない治療をしてあげて欲しい“**

みなさんも担がん症例だけでなく、様々な場面でご家族から上記のような希望を頂いたことがあるのではないでしょうか。筆者は2次診療施設で腫瘍診療に従事させて頂いてから、初診時からでも言われることが多くなった希望の1つであり、また、その返答に逡巡することが多い内容でもあります。

多くのご家族が、このような希望をおっしゃる場合は、どのような治療が行われるか、腫瘍がどのように進行しどのような転帰をとるかを想像できていない場合や、ご家族だけで知り合いの方の体験談や、インターネット等で調べた結果、不安になられている印象があります。

抗がん剤の副作用をゼロにすることは、その治療の性質上どうあっても不可能です。しかし、それを担がん症例自身と、ご家族が許容できるレベルまで軽くすることは、多くの症例で可能だと思っています。

そこで今回、貴重な連載企画のお話を頂きましたので、この“症例ベースで学ぶ、抗がん剤の副作用マネジメント”での連載を通して、少しでも読者の皆様の腫瘍診療の一助になれるよう、その基礎知識とコツなどをお伝えしていければと思います。

### 抗がん剤の種類

抗がん剤は近年では薬物療法・化学療法・抗悪性腫瘍薬など様々な名称が使われていますが、本連載では医療関係者以外の方も含めて、最も認知率が高いと思われる、“抗がん剤”を使用していきます。

ひとえに抗がん剤といっても、その種類によって副作用は様々です。がん治療に使われる薬の種類には、「細胞障害性抗がん剤」、「分子標的薬」と、獣医学領域ではあまり用いられていない「内分泌療法薬」と「その他」の4つに大別されます(**図1**)。本連載では、まずはじめに細胞障害性抗がん剤の副作用を取り上げ、その後近年獣医学領域でも普及してきた分子標的薬や抗体薬について触れて行く予定です。

### “副作用”と“有害事象”

この2つの用語は、抗がん剤に関する参考書や論文をみていくにあたり、紛らわしい点の1つです。本連載では前述の“抗がん剤”と同様に、一般的に認知率の高い“副作用(Side effect)”を使用していきます。しかし、実際近年の参考書や論文に記載されている抗がん剤に伴う不具合は、その殆どが“有害事象